



No 4

2008年1月30日

陸生ホタル生態研究会事務局

電話・FAX 042-663-5130

Eメール g.omata@jasmine.ocn.ne.jp

題字 北村 文治

1 スジグロボタルの蛹化について多摩丘陵池の沢緑地での調査

小俣 軍平（文責）

（1）はじめに

3号のスジグロボタルの問題につづいて、この号でも2007年4月以降明らかにされてきたこの種の生態について報告いたします。

スジグロボタルの成熟幼虫は、関東地方では4月末～5月のはじめ頃、それまで生活していた湿地の水辺から上陸して浅い地中に潜って土繭を作り、その中で蛹になり、約2週間して羽化するといわれています。そこで、我々は板当沢ホタル調査団の時から5年間にわたり、多摩丘陵の棲息地でこの種が蛹化する時期に、この問題の追試を棲息地に密着する形ですすめてきました（多摩丘陵には現在確認されている棲息地が20ヶ所あります）。

しかし、生息する湿地の水辺近くの土中からは、なぜかこの種の蛹が1頭もみつかりませんでした。それにもかかわらず調査地からは、我々の調査結果を嘲笑うかのように毎年この種の成虫が確実に羽化して沢山飛びました。謎は深まるばかりでした。

そこで、2007年の5月末に6年目のシーズンを迎えて、今度は調査方法を変えて、これまでのような地中の調査ではなく落ち葉も含めて地上を丹念に調査することにしました。

（2）調査方法・調査期間・自然環境

- ① 調査地 東京都八王子市 館町 池の沢保全緑地
- ② 調査期間 2007年5月24日～30日まで（7日間）
- ③ 調査者 石垣博史・皆越ようせい・小俣軍平
- ④ 調査方法 棲息地の湿地と林地の境界法面を幅約1m、長さ12mにわたって草木を刈り取り降り積もった落ち葉を一枚一枚調べ、その下の地表面の土塊を一つ一つつぶして中を調べ、地面は2～3cm浅く掘って調べました。

⑤ 調査地の自然環境

調査地は多摩丘陵の西南端、関東山地との接点近くに位置し、海拔は谷戸の低地で170m最高部、丘陵部の尾根筋で200m。幅約100m、奥行き約500m、面積約50000㎡の小さな谷戸（ヤト）です。スジグロボタルの棲息する湿地は、資料写真のように谷戸の旧水田跡に続く湿地で一面カサスゲが生い茂り、カワニナが沢山みられます。面積約1000㎡。

周囲の丘陵部は、典型的な二次林で杉の人工林が一部に点在します。これまでの調査

で、ここには植物が約 600 種、昆虫類が約 1000 種発見されています。その他哺乳類、両生類、爬虫類を含めて環境省から絶滅の恐れのある種に指定された生物が 26 種、多摩丘陵の中では大変珍しい場所の一つです。

現在 1 / 2 が八王子市立の殿入り中央公園で、1 / 2 が個人所有地で東京都の保全緑地に指定されています。なお、ここには「池の沢のホタルを増やす会」という市民組織があり、行政と共に保全活動に従事しています。生息するホタルは、ゲンジボタル・ヘイケボタル・スジグロボタル・クロマドボタル・オバボタル・ムネクリイロボタル・カタモンミナミボタルの 7 種を確認。(2007 年 6 月現在)。



① 図 調査地の冬景色、下流から上流部を望む
調査地点は左手の奥。



② 図 調査地点から下流域を望む。調査地点は黒線に沿ったくの字型の部分で、手前、右手側とも約 6m。



③ 図 ②図の手前の黒線の調査地点を左側からみたところ。法面の斜度約 20 度、湿地との落差約 1m、幅約 1 m、長さ約 6m、調査面積約 12 m²。地面は、多摩ローム層から変わった柔らかい黒色の腐葉土に覆われています。湿地との境目の土は握ると雫がしたたる状態で多湿。



④ 図 ②図の調査地点の右側から左側を見たところ。
カサスゲの生い茂る中にカワニナが多数みられ、スジグロボタルとヘイケボタルの幼虫が同じ場所で暮らす。



⑤ 図 表面の落ち葉を取り除いた地面の状態。
土塊が沢山転がっています。この土壌の中に
ホタルの土繭が混ざっています。



⑥ 図 湿地に入ってスジグロボタルの蛹を撮影
中の土壌動物写真家 皆越ようせい氏。

(3) 調査結果

- ① 採集数 スジグロボタルの繭が9個、この内2個は、繭の中で羽化していました。
クロマドボタルの土繭2個。

② スジグロボタルの繭

スジグロボタルの土繭が見つかった位置は全て法面で、水面から最も近いものが10cm
最も遠かったものが50cmでした。土繭は、いずれも地中ではなく地表と地表に近い極浅
い所にありました。したがって上掲の⑤の資料写真のように、見た目には土塊か土繭か
区別がつかず木のヘラで崩してみても、蛹が出てきて初めて土繭と判る状態でした。

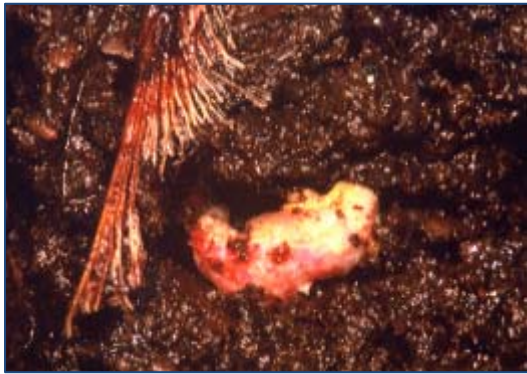
発見された9個の繭の内1個は、繭の素材が土ではなく前年の秋に落ちて腐蝕しかか
った枯れ葉でした。



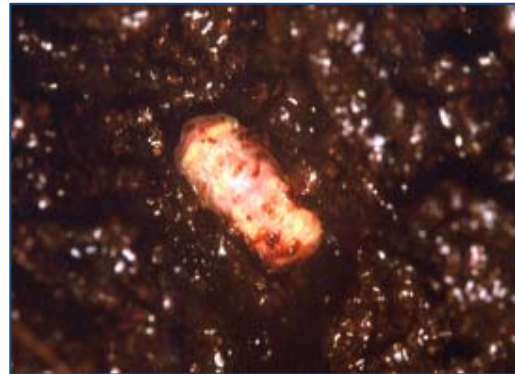
⑦ 図 これは、落ち葉の固まりを木のヘラで
軽く擦ってみたら中に蛹がみえてきた
ところ、中央ピンク色の部分。



⑧ 図 ⑦の繭を開いて撮ったのがこの写真。



⑨ 図 この個体は、地表すれすれの極浅い所に繭があった。背を下にしていた。



⑩ 図 この個体も背を下にしていた。水面から 20cm の場所で、半分地上に盛り上げた繭の中。



⑪ 図 この個体は、背を上にしていました。繭は、半分地上に膨らんだ形で作られていました。



⑫ 図 この個体は、地上に置かれた土塊のような状態で繭が作られていました。背を下にしていました。



⑬ 図 この個体は、地上に置かれた形で繭が作られていました。



⑭ 図 この個体は、すでに羽化して羽も赤色翌日には外にでる予定と想われます。

(4) 結果の考察

① スジグロボタル幼虫の蛹化する場所とその状況について

今回7日間、面積にして約 12 m²を調査して、クロマドボタルも含めて合計 11 個体の蛹が見つかったことは驚きでした。5年間探しに探してもまったく形跡さえも出てこなかったことからすると、まさに、晴天の霹靂でした。これはいったい何だろうと考えてみると、蛹探しの重点を「土中」から「地表」に変えたことがキーポイントになったと思います。これを変えずに従来通り土掘り中心で調査していたら、今回も恐らく空振りに終わっていたと思います。

この調査で、スジグロボタルの幼虫は、多磨丘陵の池の沢のような場合に腐葉土の様な柔らかい土壌の所でも土に潜らないで、地表かまたは極わずかな窪みで土繭を作ることがはっきりしました。また、1 個体ですが落ち葉をからげて繭を作っていた個体もみつけましたので、土以外のものを利用する場合のあることも判りました。

② スジグロボタルとクロマドボタルの天敵

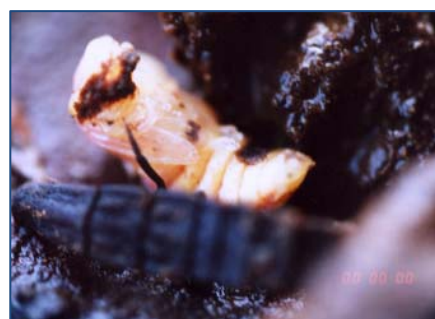
それから、実は今回の調査でもう一つ重要な発見がありました。それは、この場所で見つかったスジグロボタルの蛹とクロマドボタルの蛹それぞれ1 個体を、見つかった場所に土繭を開いた状態で残し落ち葉で覆い、羽化までを記録する取り組みをしました。

ところが、観察記録を始めて6 日目のこと、クロマドボタルの蛹もスジグロボタルの蛹も何者かに食べられてしまいました。食べられたということは、スジグロボタルの蛹が半分ほど、食べ残されていたことで判りました。クロマドボタルの蛹は脱皮殻も全て消えていました。食べた生物は大きいものではなさそうです。スジグロボタルの蛹が半分ほど残されていたので・・・。

ホタルの幼虫や蛹については板当沢での観察結果では、ほとんどの土壌動物が手を出しませんでした。ですから「日本産ホタル 10 種の生態研究」に書いた通り、クロマドボタル・オオオバボタル・オバボタルの蛹は、現地の土の上や放置木の中で無事にみな羽化まで漕ぎ着けています。ところが、池の沢では天敵が出てきました。



⑮ 図 腹部を食べられたスジグロボタルの蛹



⑯ 図 食べられる前のクロマドボタルの蛹
手前が脱皮殻。

③ スジグロボタルの成虫は発光する

スジグロボタルの成虫は、これまで発光は確認されておりました。我々も羽化する時期に成虫を捕獲して、5年間、暗室で何回も確認しましたが、発光はみられませんでした。ところが、今回土藾の中で羽化していた個体（雌雄1個体ずつ）を、家に持ち帰り、押入の中でプラスチックの器に入れて、「とんとん」と用器を軽く指でたたくと、雌雄共にかすかな連続光を出しました。この個体は、交尾を繰り返しながら発光は2日間みられました。なんとか記録写真を撮りたいと思いましたが、残念ながら私のカメラワークでは無理でした。

④ スジグロボタルとヘイケボタルの蛹の違い

それから、スジグロボタルの棲息地には、よくヘイケボタルが共生しています。今回調査した池の沢もその一つです。両種の蛹は大変よく似ていて一寸みただけでは、区別が付きません。次の図は、左がスジグロボタル、右がヘイケボタルです。目視でも判るのは、目の大きさです。スジグロボタルは大変小さいです。それからこの写真ではよく判りませんが、発光器の形も違います。どちらも左右に分かれた発光器ですが、ヘイケボタルは側板に近くスジグロボタルは、中央に並んでいます。



⑬ 図 左側スジグロボタルの蛹、右側ヘイケボタルの蛹、撮影地は池の沢

⑤ スジグロボタルの分類をめぐって

これは、蛇足になりますが、スジグロボタルは分類上では現在「陸生ホタル」になっています。しかし、幼虫が湿地に生活していることから、最近ホタルの研究者の間ではしばしば「半水生」と呼ばれています。そのためか、インターネット上でも「半水生」といういい方がかなり使われています。

スジグロボタルの幼虫は、湿地の中で水に浸かっていたり、水中を泳いでいたり、そうかと思うと湿地に降り積もった落ち葉や細い枯れ枝の上に登っていることもあります。また、カワニナを湿地の中で食べているようですから、こうした点からみると、「半水生」といういいかたは、うまいいい方だと思います。しかし、それでは、ホタルの分類の上

で「水生」、「陸生」のように「半水生」という用語の規定がきちんとされているのでしょうか。私の知る限り明確な規定はないように思います。その点がはっきりしないままに「半水生」という用語が一人歩きをしているのは、大変気になります。

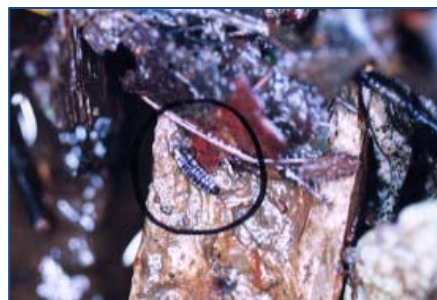
次の4点の写真は、今回の調査地である池の沢で撮ったものですが、⑬の幼虫は湿地の木片の上に静止しています。体は完全に水から出ています。これは夜撮影しました。⑭の幼虫は、体が立った状態で体半分水から出ています。これも夜間の撮影です。21の幼虫は昼間、池の沢の湿地で水生昆虫の調査をしていた際に運良くみつかった個体です。ホウノキの葉が浅い水中に沈んでいて（水深は10mm位）その上に静止していました。この場合は、体全体が水中に沈んでいます。スジグロボタルの幼虫は上手に泳ぎます。

我々が多摩丘陵の棲息地で10年間にきてきた限りでは、スジグロボタルの幼虫はこの様に湿地の水辺から遠く離れることはありません。ところが、3号で紹介しましたように、隠岐の島では、スジグロボタルの幼虫と思われる個体が、沢筋から2m以上離れた杉林の更地の上で、夜間にヒメボタルやオバボタルの幼虫と一緒に発光している事実が、八幡浩二氏他によって観察されています。これにも大変驚かされました。

そこで、お願いですが、どなたかスジグロボタル幼虫の解剖をして、呼吸器の問題を調べて頂けないものでしょうか。幼虫は4月以降になれば、採集してお届けできます。



⑬ 図 スジグロボタル♂成虫



⑭ 図 スジグロボタルの幼虫体長 8mm



⑯ 図 スジグロボタルの幼虫 体長 8mm



21 図 スジグロボタルの幼虫 体長 8mm

注 この報告の中で使用した写真のうち、⑦・⑧・⑨・⑩・⑰は、いずれも日本写真家協会会員 皆越ようせい氏に撮影して頂いたものです。有り難う御座いました。

2 愛知県豊田市のヒメボタル発光時間の例

名古屋昆虫同好会・三河昆虫研究会会員

吉鶴靖則

(1) はじめに

愛知県豊田市水源町～平和町付近の矢作川沿いの雑木林などでは、ヒメボタルの発生が1997年には知られていたようである(岩月, 2000)。豊田市のヒメボタルの状況をまとめた岩月(2000)は、その他の箇所も含め、午前0～1時ぐらいに発光個体が多いと述べている。しかし、豊田のヒメボタルは午後8～9時ぐらいに多く光るとしばしば地元で話題が出ており、一晩調査した記録がないことから、宵型なのか深夜型なのかが不明であった。

近隣の愛知県のヒメボタルの発光時間については、名古屋市名古屋城外堀での大まかな記録(大場, 1978)や、名古屋市天白区の相生山での記録があり(近藤, 2004)、いずれも一晩だけでの調査結果であるが深夜型の結果が出ている。これに対し名古屋市名東区の香流川のヒメボタルは夜8時ぐらいから発光するというが(大場, 1991)、具体的な発光時間帯のデータは示されていない。このため発光時間のピークは不明で宵型と言い切れる内容となっていない。

このため豊田市で発光時間帯を調べる必要があると考え、今回極めて断片的な内容であるが、宵型のうわさがあった豊田市水源町での調査結果を紹介する。

なお、当地域のヒメボタルの形態であるが、オスでは前胸に模様の変異が認められたが(図1・2)、今回の調査ではメスを発見できなかったため不明である。生態型については今回調べていない。



図1 ヒメボタルのオス
前胸の模様が濃い個体



図2 ヒメボタルのオス
前胸の模様が薄い個体

(3) 調査方法

現地は料亭の敷地であるため、営業日は夜間も閉店まで照明がついている。ただしヒメボタルに対しての配慮から、発光が見られる期間は駐車場の照明は落としてくださっている。それでも休業日と比べると光の影響がある可能性があったため、調査日は営業

日（2007年5月28～29日）と休業日（2007年6月4～5日）で設定した。



図4 生息地の環境 雑木林の林縁部



図5 生息地の環境 草地

(4) 結果および考察

両日とも宵型的な小さなピークがあるが、全体としては深夜型を示していた。営業日である5月28～29日では消灯されたのが21時40分で、その直後に小さなピークが見られたことから多少街灯の影響があったものと考えられたが、全体としては大きな影響を与えているとは思われなかった(図6)。

名古屋城のヒメボタル発生地は都心部にあるために周辺の人工照明の影響が大きく、飛翔発行活動が抑制された結果、深夜に活発になるという考え方がある(大場, 2000)。これに対し相生山のヒメボタルも深夜型の活動をするが、曇りの日は雲への都市部照明の乱反射でやや明るいものの、街路灯などの照明がない生息地もあり、概ね暗い環境といえる。本調査地は真横に街灯と料亭がある以外は全体として暗い環境であり、相生山同様、照明が飛翔行動に大きな影響を与えた結果、深夜型になったとは考えにくいと思われる。

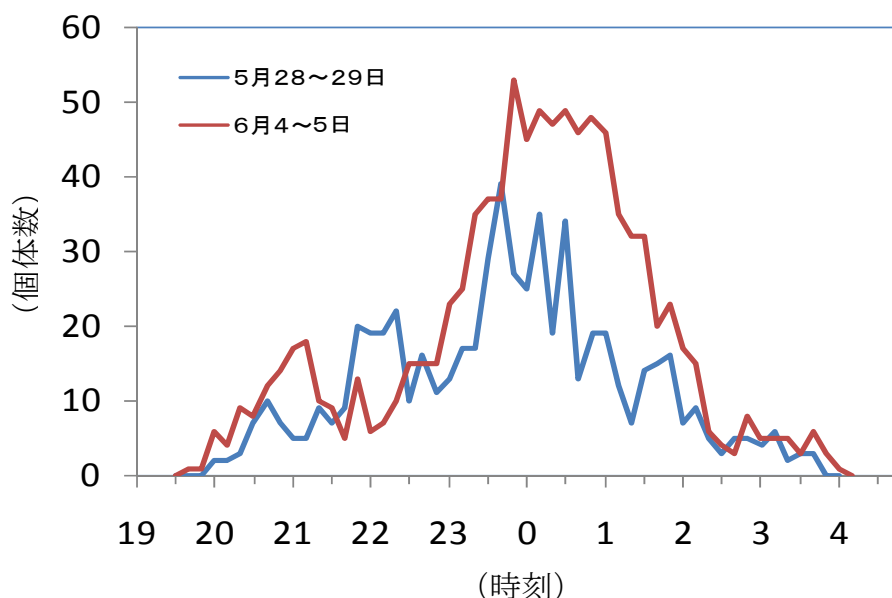


図6 豊田市水源町におけるヒメボタルの発光時間と個体数

(5) 今後の課題等

調査日が少ないため、より多くの事例を増やして精度を上げていく必要があると認識していると共に、近隣の生息地での状況も知りたいところである。また、わずかではあるが宵型と深夜型の2つのピークが見られたため、活動時間が異なる個体群、もしくは種類が混成しているのかどうかを確認する必要があると考えている。今回は地元で保護の動きが出ていることに配慮して採集を行っていないため、雌雄共にサンプリングする必要があると考えている。保護を考える上では幼虫の具体的な生息地の把握も重要であるので、今後はこのような調査も行っていきたい。

また、調査地は私有地であるため、観察には事前に許可を得るなどの配慮が必要である。

当地を観察される方にはその旨をご理解いただき、くれぐれも配慮をお願いしたい。このため今後の調査や地元での観察会や保護などをどのように行っていくかも検討課題である。保護に関しては幸い土地の所有者がかなり配慮してくださっており、木の伐採や草刈りの時期なども気にされていた。よりよい保全方法が知りたいということなので、事例などをご存じの方はご教示いただきたいと思います。



図7 ヒメボタルの舞 2007年5月27日 23:17~23:23

1分ごとに撮影したコマを合わせたもの

(6) 謝辞

調査および撮影に際し、さくら亭豊龍閣の女将榊原直美さん他従業員の方々と堀田信二氏には場所や情報を提供していただいた。また、八木剛氏、小原玲氏、小俣軍平氏にはヒメボタルの生態について日頃からご教示いただき、調査と発表のきっかけを頂いた。つたない発表で申し訳ないが、お世話になった方々と先生方に厚くお礼申し上げる。

(7) 引用文献

岩月学 (2000) 豊田市でヒメボタル確認. 三河の昆虫 47:476-477. 三河昆虫研究会.

近藤記巳子 (2004) 相生山緑地自然観察会 ～ヒメボタル～ 時間軸による飛翔数の推移.

第3回ヒメボタルサミット in 愛知報告書. 31. ヒメボタルサミット in 愛知実行委員会.

大場信義 (1978) ヒメボタルの生活. インセクトリウム 15(6):32-36.

大場信義 (1991) 香流川のヒメボタル. 香流川のほたる 2:10-11. 香流川のホタルを守る会.

大場信義 (2000) ヒメボタルの2生態型の発光パターンと発光コミュニケーション. 横須賀市博研報 (自然) 47:1-22

〒 476-0012 東海市 富木町 伏見4-3-11 吉鶴 靖則

※ 資料写真



この写真は、この度調査月報4号に論文をご寄稿頂きました、吉鶴 靖則さんです。昨年の10月2日に「豊田自然観察の森」をお訪ねしたときに撮らせて頂きました。

吉鶴さんは、鳥類の研究がご専門だそうですが、昆虫の生態についても詳しく、豊田自然観察の森の陸生ホタルについては、クロマドボタル雄成虫の前胸赤斑の変異について貴重な記録写真を提供して頂きました。この写真がきっかけになって、陸生ホタル生態研究会の会員にもなっていただき、現在、愛知県を中心に中部・東海地方のホタルの生態についてご指導と情報の提供をして頂いております。なお、「豊田自然観察の森」については、後日、機会をみて紹介いたします。

3 マドボタル属の幼虫の形態の違いについて

クロマドボタルとオオマドボタルについて、分類上では、「別種」となっておりますが、以前から同種説（大場・後藤 全国ホタル研究会）があり、「日本産ホタル 10種の生態研究」の中で、クロマドボタル・オオマドボタルのミトコンドリアDNAの解析を担当して下さった、鈴木 浩文先生、それから、雄成虫の前胸背の赤斑の変異や形態を調査した、八木 剛先生の研究結果でも、両種の区別は難しいといわれています。そんな中で、通信2号でもお知らせしましたように、四国の愛媛県久万高原町から、クロマドボタル雄成虫が発見採集されています。こうしたことに関係して、福岡県 久留米市在住の、今坂正一さんが、オオマドボタルとクロマドボタルの棲息地で板当沢ホタル調査団がこれまでに採集した幼虫について、形態上で相違がないのかどうか、詳細に調べて下さいました。その結果（予報）が、次のページのカラー写真と解説です。この写真にかかわる解説は、今坂さんからメールで事務局に送られてきたものです。尚、事務局で提供した幼虫の採集地は、次の4ヶ所です。

- ① 東京都 町田市 相原町 東京造形大学キャンパス前（クロマドボタル棲息地）
- ② 山梨県 南都留郡 道志村（クロマドボタル棲息地）
- ③ 静岡県 賀茂郡 河津町 七滝温泉（オオマドボタル棲息地、但し赤斑は楕円形）
- ④ 大分県 日田市 諸留町（オオマドボタル棲息地、赤斑は方形）
- 今坂さんは検討にあたり、この他に山口県萩市の個体も追加しておられます。

マドボタル属幼虫の検討 (予報)

日本昆虫学会 会員 今坂 正一

さて、マドボタル幼虫の検討がだいたい終わりましたので、お知らせいたします。

結論から申しますと、オオマドボタルとクロマドボタルの幼虫を明確に2つに分ける形態的な特徴は見つかりませんでした。

お送り頂いた4つの個体群だけに限ってみても、実際に2種に分けられるのか、それとももっと多くの種なのか、定かではありません。

形態的な特徴は、幼虫の齢でも多少違うので、長さの比率や、何か特徴的な形のあるなしでは、区別することは、今回はできませんでした。

ただ、傾向として明らかになったことが幾つかあります。

今回の前提としては、オオマドボタル(日田産)、クロマドボタル(町田産)として、両者の違いを見つけることから始め、その他の地域のものが、どちらに近いかに判断しました。手元にあった、山口県萩産も検討に加えました。

日田産と町田産で、形としては、

- (1) 前胸腹面の前縁に、顕著な4つの突起を持つ → 日田産
前胸腹面の前縁の突起は小さく微弱 → 町田産

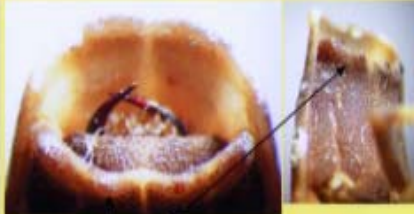
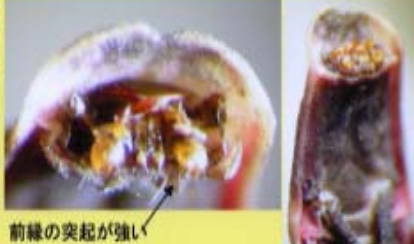
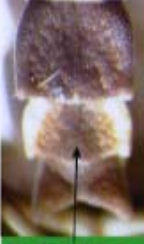
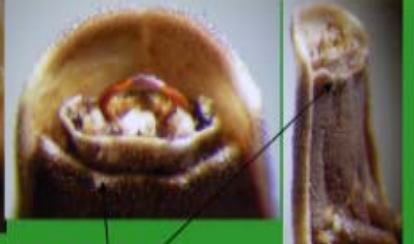
また、色においては、

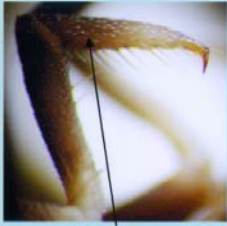
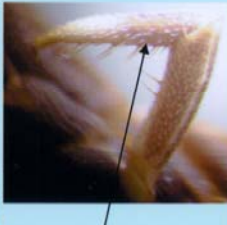
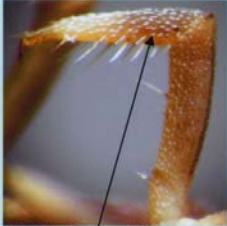
- (2) 腹節背板の後ろから2番目の節は中央に三角形(やや小さい)黒紋をもつ → 日田産
腹節背板の後ろから2番目の節は中央の黒紋は大きく、側縁が狭く白色 → 町田産
- (3) 前肢脛節は基部1/3以下の狭い範囲が黒色 → 日田産
前肢脛節は基部1/2あるいはそれ以上が黒色 → 町田産

などの違いが見つかりました。このことは、両産地のほぼ全ての個体にあてはまるようです。しかし、例外として、2について、日田産2とした個体は黒紋がかなり広がり、町田産に近づいています。

さて、上記の基準でその他の、山梨、伊豆、萩の個体を当てはめてみますと、2と3については、ほぼ、山梨と伊豆は町田と同じ(例外として、伊豆の個体3では、2腹節背板は町田に近く、3の前肢脛せつは日田に近い)、萩はほぼ日田に近いという結論が出ました。

2008. 1. 12 マドボタル幼虫の検討 今坂正一

腹節末端背面	前脛節	頭・前胸腹面	産地	小俣判断
			大分県日田市	オオマドボタル 赤斑は長方形 (成虫前胸)
黒い部分が小さい	黒い部は1/3以下	日田54-1 前縁の突起が強い		
			大分県日田市	オオマドボタル 赤斑は長方形 (成虫前胸)
黒い部分が多少大きい	黒い部は1/3以下	前縁の突起が強い 日田54-2		
			山口県萩市	
黒い部分が小さい	黒い部は1/3以下	前縁の突起が強い 山口		
			静岡県賀茂郡 河津町七滝温泉	オオマドボタル 赤斑は横円形 (成虫前胸)
黒い部分が多い	黒い部は1/3以下	前縁の突起は多少強い 伊豆67-3		

腹節末端背面	前脛節	頭・前胸腹面	産地	小俣判断
			静岡県賀茂郡 河津町七滝温泉	オオマドボタル 赤斑は楕円形 (成虫前胸)
黒い部分が多い	黒い部部は1/2程度	前縁の突起は多少強い 伊豆 67-1		
			静岡県賀茂郡 河津町七滝温泉	オオマドボタル 赤斑は楕円形 (成虫前胸)
黒い部分が多い	黒い部部は1/2程度	前縁の突起は弱い 伊豆 67-2		
			東京都町田市	クロマドボタル 真っ黒 (成虫前胸)
黒い部分が多い	黒い部部は1/2程度	前縁の突起は弱い 町田24		
			山梨県南都留郡 道志村	クロマドボタル 真っ黒 (成虫前胸)
黒い部分が多い	黒い部部は1/2程度	前縁の突起は弱い 山梨12		

※ 今坂さんの資料写真は、顕微鏡写真で鮮明に撮れています。しかし、普通紙で印刷するとこの様に大幅に質がおちます。そこで、この今坂さんの資料写真をホタルの研究のために欲しい方は、事務局までメールでお知らせ下さい。写真紙に印刷したものをお送りします。今坂さんからは、「研究のためつかうなら会員の方に提供しても結構です」とお言葉をいただいております。また、次号で、今坂さんの調査した、マドボタル属成虫の交尾器の写真と解説を掲載いたします。ご期待下さい。

4 お知らせと連絡

(1) 拡大事務局会の報告

- 1月27日に拡大事務局会を、学習会をかねて八王子市立学園都市センターの第四セミナー室で開催しました。当日は、午後1時から事務局会、午後2時半から4時半まで学習会を開催しました。
事務局会では、昨年10月に発足に至った経過報告、それから、板当沢ホタル調査団解散（2007年4月1日）以降の研究進行状況の報告、会員数、財政問題来年度へ向けての課題等を話し合いました（役員の方々には資料をお送り致します）。
- 後半の学習会では、東京都と埼玉県にまたがる狭山丘陵で保全活動に取り組んでおられる「ふしぎの森の会」代表、蒔田 和芳氏をお招きして、ホタルを中心に、狭山丘陵で観察された生物の珍しいお話を沢山伺いました。いずれも、「え！本当ですか？」と驚くような内容でした。この蒔田さんの講演の内容については、調査月報か年報に収録して後日お知らせ致します。
- また、今度の講演に関連して、狭山丘陵には、陸生ホタル生態研究会から荻野 昭・小俣 軍平の二人で、2月14日に現地調査にいらします。結果は後日、調査月報で報告致します。

(2) 寄付・カンパの報告 敬称略、順不同

2008年に入り次の方々からカンパを頂きました。謹んでご報告申し上げます。
有り難う御座いました。

石川県	新村 光秀	5,000円
奈良県	宮武 頼夫	2,000円
東京都	小峰 光宏	10,000円

(3) 2007年度調査年報の編集について

3月末を目途に、2007年度の調査研究結果をまとめて編集作業を行い、5月末を目標に「陸生ホタル生態研究会 調査年報（I）」を当初の予定通り刊行したいと想います。皆さん方ふるって執筆して下さい。陸生ホタルに限らずゲンジ、ヘイケも大歓迎です。

また、ホタルがかかわっている問題でしたら昆虫に限らず生物一般でもかまいません。

体裁はA4版で、カラー図版、写真を豊富に取り入れたもの、横書き40字×40行、明朝体(10,5)、最初にタイトル、2行目右側に執筆者名、文体は原則「である体」ですが、書きやすい文体でどうぞ。こだわらせ。図版、写真の説明文は下につけて下さい。章、節の番号は、アラビア数字で、1, 2・・・、(1)、(2)・・・、①、②・・・のようにして下さい。原稿の長さ制限はありません。思いのたけを書いてください。原稿は、「W」で書いて、CDに収録して3月末までに事務局宛お送り下さい。